

学校の自走をアシスト！自立した学習者を育てる校内支援プログラムの作成（1年次）

島根県教育センター浜田教育センター  
研究・研修スタッフ 共同研究

## 目 次

【要旨】	1
1 はじめに	1
2 研究の目的	1
3 研究の内容	2
(1) 本研究の位置づけ	2
① 令和答申に示された学校教育の目指すべき姿	2
② なぜ「学び続ける」必要があるのか	2
(2) 前研究の追跡調査	3
① 調査の方法	3
② 結果と考察	4
(3) 校内支援プログラム「動画ガイド」の製作	8
① 作成の基本方針	8
② チャプター1 「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を図ることが求められている理由と背景	10
③ チャプター2 「個別最適な学び」「協働的な学び」「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」の理解	11
④ チャプター3 教師の役割と教育課程の編成	13
⑤ チャプター4 授業事例から子どもの姿をイメージする	15
⑥ チャプター5 充(10)実ナビゲーションの活用	17
⑦ 校内研修セッション	20
4 研究のまとめ	21
5 おわりに	22
【引用文献】	23
【参考文献】	23

※本研究による紀要文章中の表現は次のように統一しています。ただし、文献からの引用については、この限りではありません。

教 師…教える立場の者

教職員…学校で子どもに関わる者

子ども…特定の校種によらない児童生徒

# 学校の自走をアシスト！自立した学習者を育てる校内支援プログラムの作成（1年次）

島根県教育センター浜田教育センター 研究・研修スタッフ 共同研究

## 【 要 旨 】

本研究は、1 年計画の研究であり、各学校が「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を図っていくためのきっかけとなるように、令和4年度に送付した『今の学びをちょこっと変えルートマップ』と『充（10）実ナビゲーション』を用いた校内支援プログラムを提案することを目的としている。

これまで島根県教育センター浜田教育センター（以下、浜田教育センターと表記）が製作してきた研究成果物である「動画」『今の学びをちょこっと変えルートマップ』『充（10）実ナビゲーション』の閲覧経験やこれらの成果物以外に求める情報などの調査を行った。アンケートから、教材研究や教材準備をする時間を確保することに対して課題と感じている傾向が強いことや、解決するために必要だと考えている情報・資料として、「実践例」を求める傾向が強いことが明らかとなった。

そこで、実践事例や充（10）実ナビゲーションの活用例などを盛り込んだ研修動画ガイドを作成した。

【キーワード：個別最適な学び 協働的な学び 一体的な充実 自立した学習者 学校の自走】

## 1 はじめに

浜田教育センターでは、令和3年度の研究で、学校が「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」に取り組む際のサポートとして、正しい理解と具体的なイメージをもつことができるよう、テーマに関連する文献や先行研究、先進校の視察による具体的な実践例の収集・整理を行い、校内研修用の動画と資料を作成した。令和4年度は「動画」「資料」等を活用した出前授業の実施を行うとともに、そこで得たフィードバックを基に、出前講座や活用資料の修正・改善を図った。また、校内研修に取り組むヒントとなる提案カードを作成し、協力校を得て校内研修を実施してもらい、修正・改善を図ってきた。修正・改善をしたリーフレット資料『今の学びをちょこっと変えルートマップ』（以下、ルートマップ）と『充（10）実ナビゲーション』（以下、充実ナビ）は授業改善に役立てていただけるように県内全ての学校に送付した。その結果、様々な教育機関から反響があった。令和5年度の出前講座の要請が増えたことから「個別最適な学び」や「協働的な学び」に対する学校の関心は高まってきているとも考えられる。

その反面、要請が増えるということは我々が送付した成果物だけでは研修を進めることが難しいと考えられる。例えば、学校において一定の時間を確保して校内の研修を実施することが難しい、研修事例等ベースの少ないところから研修を組み立てるものの負担などである。

そこで本研究では、各学校が「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」を図っていくためのきっかけとなるように、現状を把握するとともに令和4年度に送付した成果物を用いた校内支援プログラムを提案することとした。

## 2 研究の目的

本研究は、各学校が「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を図っていくためのきっかけとなるように、令和4年度に送付した『ルートマップ』と『充実ナビ』を用いた校内支援プログラムを提案する。

### 3 研究の内容

#### (1) 本研究の位置づけ

##### ① 令和答申に示された学校教育の目指すべき姿

ここで『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）」（以下、令和答申と表記）を一部抜粋する。ここから我々学校教育の目指すべき姿が見て取れる。

- ・社会の変化が加速度を増し、複雑で予測困難となってきた中、子供たちの資質・能力を確実に育成する必要がある、そのためには、新学習指導要領の着実な実施が重要である。
- ・社会の急激な変化の中で再認識された学校の役割や課題を踏まえ、2020年代を通じて実現を目指す学校教育を「令和の日本型学校教育」とし、その姿を「全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学び」とした。
- ・各学校段階における子供の学びの姿や教職員の姿、それを支える環境について、「こうあってほしい」という願いを込め、新学習指導要領に基づいて、一人の子供を主語にする学校教育の目指すべき姿を具体的に描いている。

##### ② なぜ「学び続ける」必要があるのか

これからの教育は、個人としてよりよい人生を送ると共によりよい社会づくりに主体として参画することに資するものである必要がある、子ども達自身の手で、正解ではなく最適解や納得解を求め続けていく学びを豊かに展開していくことが期待される。また、2022年6月7日に閣議決定された「経済財政運営と改革の基本方針 2022 新しい資本主義へ～課題解決を成長のエンジンに変え、持続可能な経済を実現～」にも「人と人との触れ合いも大事にしながら、1人1台端末環境を前提として、自分のペースで試行錯誤できる「個別最適な学び」と「協働的な学び」の具体化を早急に実現する」として示している。このことや令和答申、また「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」を踏まえれば、「個別最適な学びと協働的な学び、その一体的な充実を図る」ことは「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指すことにあること、「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善によって予見できない不明瞭な未来とされている2030年を生き抜くことのできる“人”を育てることに目的があることが見えてくる。

OECDが示しているコンセプト・ノートにおいては、「私たちが実現したい未来において、よりVUCAとなる世界において、目指すべき方向にナビゲートしていくことを象徴するもの」としてラーニング・コンパスを用いている。また、「私たちが実現したい未来、すなわち個人及び集団としてのWell-beingの実現に進んでいくための方向性を示すものである」と述べられている。先行きが不透明で、将来の予測が困難なVUCAな世界で満足のいく人生を過ごしていくためには、子どもがWell-beingな世界を実現できるように自身でナビゲートするよう学ぶことが必要となる。その方向を示唆するものとして提示している。

さて、「学び続ける児童生徒像」から考えたい。自分自身の生き方をより良くするために、何が必要か考え、探し、解決していく営みを「学び」とするのだとすれば、OECDが提唱するWell-beingな生き方を旨とすることとほぼ同義となる。

VUCAの時代を生き抜いていく子ども達は、今以上に自分自身を見失わないように、自分が何を指して学んでいるのか（進んでいるのか）を認識する必要がある。だとすれば「自己理解」「自己認

識」は必要な資質であり、広くとらえれば「自分は何が得意で、どのように生きていくことがベストなのか」という哲学的な思考にもたどり着くのかかもしれない。

最終的に「資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的に学び続けるような人を育てる」ことが目的であるならば、子ども自らが問いを見出し、判断し、選択し、解決する機会を、学校教育の中で設定する必要があることは言うまでもない。このためには、自分の得意が分かり、興味や関心がどの方向に向いているのか知っていることも必要である。ここから、令和答申で示された「個別最適な学び」の必然も見えてくる。

また、よりよい人生は「学校教育」で完結するわけではない。人生を歩むためには、先の「問いを見出し、判断し、選択し、解決する」場面は学校以外でこそ多く出会うはずである。学校教育で身に付けたことを常にアップデートしながら生きていくのである。これを「学び続ける」と捉え、その基礎を学校教育で培うのだとすれば、我々が目の前にいる子ども達に何を提供するかによってその子の今後の人生に影響を及ぼすことになる。今提供している教育は果たして 2030 年に生きて働く資質・能力に対峙するものであるかどうかは、検討すべき時期にきていることは明らかである。

だからこそ、個別最適な学びや協働的な学びの先にある「自立した学習者」を育成するための主体的・対話的で深い学びの授業改善こそ重視し、そこへの理解を促すための研究であることを明記しておきたい。

## (2) 前研究の追跡調査

本研究で作成する校内支援プログラムは、各学校が「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を図っていくためのきっかけとなるように、これまでの研究成果を用いた校内支援プログラムを作成する。そこで、校内支援プログラム作成にあたり教職員のニーズを把握するため、県内の教職員に対して実態調査を行った。調査の視点としては、浜田教育センターが作成した研究成果物は研修資料として活用できるものであったか、また校内で個別最適な学びと協働的な学びを視点に入れた実践を進める際に、どのような課題を感じ、どのような情報や資料を必要としているのかといったものである。浜田教育センターが提供する研修講座等に参加した教職員を対象とし、質問紙調査を行った。

### ① 調査の方法

調査方法として、表 1 に示す研修を受講した者（計 155 名）に対して、研修開始前あるいは研修後に回答時間を設け、質問紙に回答してもらった形で調査を行った。研修時間内に回答できなかった者については、後日送付してもらった形で回答を得た。用いた質問紙を表 2 に示す。質問紙の記述式回答項目③④については、KH Coder（樋口耕一 2020）を用いたテキスト分析を行った。

表 1 質問紙調査を行った研修と回答者数

月日	研修講座名	実施場所	回答者数(名)
6月27日	〔出前講座〕 Well-being な生き方を目指して ～個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実～	浜田市立石見小学校	18
7月31日	〔出前講座〕 チーム学校で取り組む特別活動の授業づくり	邑南町立高原小学校	7
8月2日	〔出前講座〕 Well-being な生き方を目指して ～個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実～	松江市立湖南中学校	20
8月4日	教職経験6日目研修第Ⅲ回教育センター研修 及び 中堅教諭等資質向上研修第Ⅲ回教育センター研修	浜田教育センター	31
8月21日	〔出前講座〕 Well-being な生き方を目指して ～個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実～	松江市立来待小学校 ・宍道中学校大野原分校	9
8月23日	〔出前講座〕 Well-being な生き方を目指して ～個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実～	雲南市立田井小学校	7
9月28日	初任者研修第Ⅳ回教育センター研修	浜田教育センター	63

表 2 質問紙の項目

質問番号	質問項目 【質問カテゴリー】	回答項目
①	浜田教育センターが作成した研究成果物（リーフレット資料『今の学びをちょこっと変えルートマップ』、『充（10）実ナビゲーション』、動画 など）を見たことがありますか。 見たことがあるもの全てにチェックをしてください。 【浜田教育センター研究成果物の閲覧経験】	<選択式> □ある □ない ※ある場合は以下を選択 (複数回答可) □個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に関わる動画 □リーフレット資料 『今の学びをちょこっと変えルートマップ』 □『充（10）実ナビゲーション』
②	学校が校内全体での個別最適な学びと協働的な学びを視点に入れた実践・取組をしていくためには、研究成果物のほかにどんなものがあればいいと考えますか。 【求める情報】	<選択式>（複数回答可） □実践例 □1時間の指導案集 □参考文献 □個別最適な学びと協働的な学びを進めるための校内研修ガイド（手引き） □その他（※自由記述欄あり）
③	個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を進める上で、実践へとつなげていく場合どういった課題を感じていますか。（どういった点が課題となると考えますか。） 【進める上での課題】	<記述式>
④	③で感じている課題（課題だと考えること）を解決するために、どういった情報や資料が必要ですか。どういった情報や資料があれば参考にできますか。 【課題解決に必要な情報・資料】	<記述式>

## ② 結果と考察

### ア 選択式項目の結果と考察（質問番号①②）

質問番号①「浜田教育センターが作成した成果物を見たことがありますか。」についての回答結果を図1に、また、『ある』と回答した者の各資料の内訳を図2に示す。同様に、質問番号②「求める情報」についての回答結果を図3に示す。

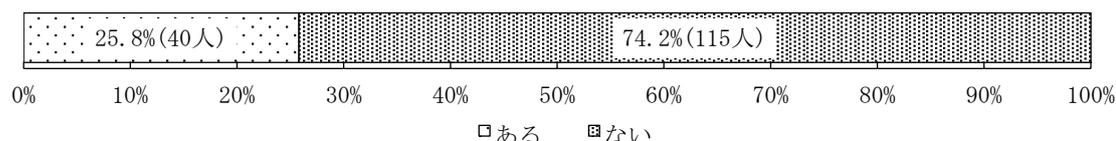


図1 質問番号①「浜田教育センター研究成果物の閲覧経験」

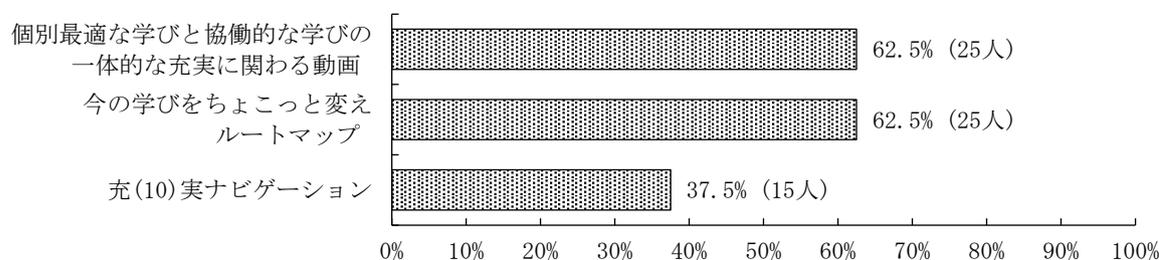


図2 質問番号①「『ある』と回答した者の各資料の内訳」

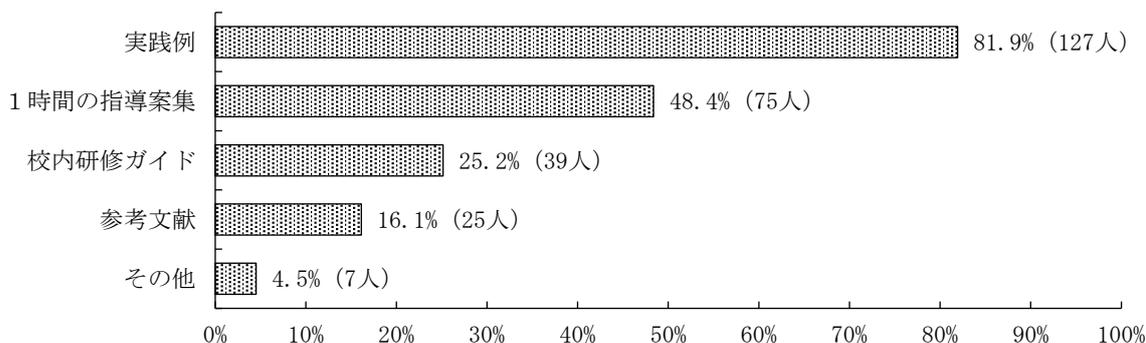


図3 質問番号②「(研究成果物以外)求める情報」

図1から、約25%の教職員が浜田教育センターの作成した成果物を見たことがあることが分かった。一方、約75%の教職員は見たことがないと回答している状況であった。令和4年度末に県内の全小学校、中学校、高等学校、特別支援学校に配布した資料であったが、閲覧状況には課題が残る結果となった。

図2の「『ある』と回答した者の各資料の内訳」を見ると、充実ナビに比べ、動画とルートマップの方がやや閲覧者数が多い状況であった。とはいえ、その差は僅かであるため、研究成果物の記載内容や、媒体(動画資料、A3判紙資料(ルートマップ)、A5判紙資料(充実ナビ))による違いが、閲覧しやすさに与えている影響は少ないと推察する。

図3は、「学校が校内全体での個別最適な学びと協働的な学びを視点に入れた実践・取組をしていくためには、研究成果物のほかにどんなものがあればいいと考えますか。」という質問に対する結果である。8割強(81.9%)の教職員が「実践例」と答え、次いで「1時間の指導案集」が48.4%、「校内研修ガイド」が25.2%、「参考文献」が16.1%となった。浜田教育センター研究成果物は、個別最適な学びとは何か、その背景と求められる学びは何かといった、理解の糸口となるような理論的な部分を中心に作成したものであるため、具体的な実践事例については十分に触れることができていなかった。そのため、このような結果になったのではないかと考える。また、個別最適な学びについて概ね捉えることができた者は、さらなる理解のため実践事例を求めるであろうし、明日からの授業に生かそうと考える者も授業の具体の例を求めるであろう。本研究で作成する校内支援プログラムは、教職員の理解を深め、且つ各校において研修・研究が促されるものでなければならぬため、実践事例を取り入れたものにする必要であると考ええる。

### イ 記述式項目(質問番号③)の結果と考察

質問番号③「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を進める上で、実践へとつなげていく場合どういった課題を感じていますか。(どういった点が課題となると考えますか。)」に書かれた記述をKH Coder(樋口耕一2020)を用いてテキスト分析を行った。記述された文章中から語彙を抽出(総数3,379語・使用1,392語)し、出現回数上位20位までの語彙を表3に示す。

また、語彙同士の関係性をみるために、テキスト分析により作成した共起ネットワーク図(KH Coder)を図4に示す。

表3 質問番号③「進める上での課題」に記述された文章中における出現回数上位20位の語彙

位	語彙	出現回数	位	語彙	出現回数
1	学び	43	11	最適	17
2	難しい	32	12	考える	15
3	時間	27	13	学習	14
4	個別	25	13	支援	14
5	生徒	20	13	把握	14
6	協働	19	16	思う	12
6	必要	19	17	活用	11
8	実践	18	17	児童	11
8	実態	18	19	ICT	10
8	授業	18	19	課題	10

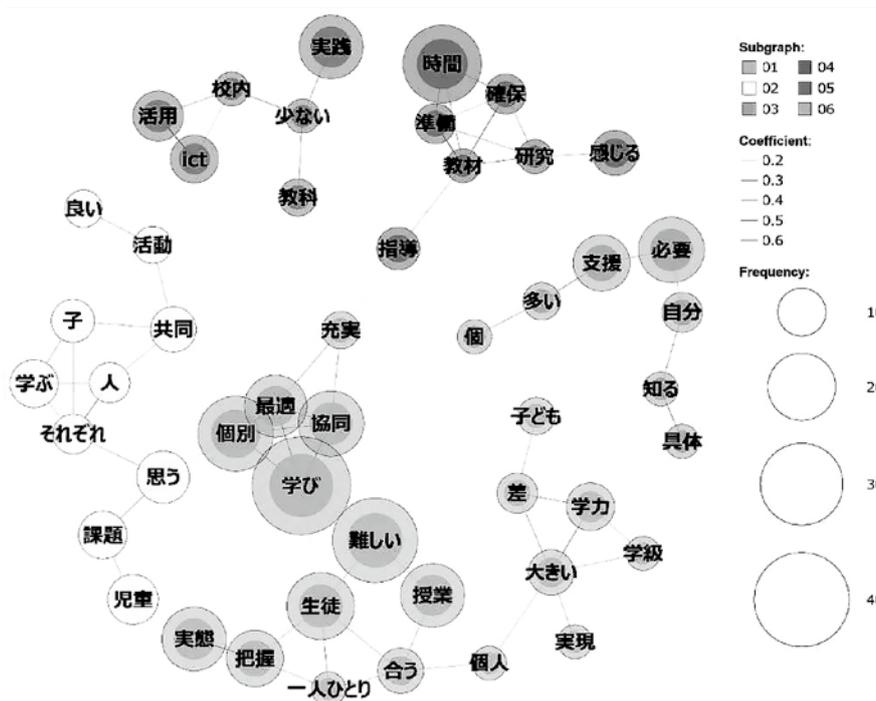


図4 質問番号③の回答に記述された語彙の共起ネットワーク図

「時間」という語彙が多く、次いで「生徒」「必要」「実践」「実態」「授業」と続いている。

図4は、一つ一つの文章で出現する語彙のうち、共起関係（共通に出現）が近いものを線で結んだものである。共起関係の強弱については、線の太さで示している。また、円の大きさは出現回数を示し、同じ色の円は距離が近い語彙同士であることを示している。本図は、抽出語彙数を上限60として出力したものである。

まず、表3において出現頻度の多かった、「難しい」という語彙と、図4の共起関係を関連させながら考察する。「難しい」という語彙には「授業」「生徒」「実態」「把握」といった語彙との共起関係が強い。つまり、進める上での課題として、個別最適な学びの視点で生徒の実態を把握することや、実態をもとに個別最適な学びの視点で授業設計することに対して、難しさを感じている傾向が強いことが分かった。

次に、「時間」という語彙には「確保」「教材」「準備」「研究」といった語彙との共起関係

表3を見ると、上位から「学び」「難しい」「時間」と続いている。一方、このテキスト分析では、文章中に記述された語彙を無作為に抽出し、その出現頻度を並べたものであるため、質問に対する回答として直接的な意味を持たないものも含まれている。具体的には、本調査においては、「個別最適な学び」や「協働的な学び」等の言葉である。したがって、表3に示す語彙においては、「学び」「協働」「最適」がそれに該当する。つまり、「進める上での課題」に対して直接的な意味のある語彙としては、「難しい」

が強い。つまり、教材研究や教材準備をする時間を確保することに対して課題と感じている傾向が強いことが明らかとなった。

#### ウ 記述式項目（質問番号④）の結果と考察

質問番号④「③で感じている課題（課題だと考えること）を解決するために、どういった情報や資料が必要ですか。どういった情報や資料があれば参考にできますか。」に書かれた記述を KH Coder（樋口耕一 2020）を用いてテキスト分析を行った。記述された文章中から語彙を抽出（総数 2,025 語・使用 787 語）し、出現回数上位 20 位までの語彙を表 4 に示す。また、語彙同士の関係性をみるために、テキスト分析により作成した共起ネットワーク図（KH Coder）を図 5 に示す。

表 4 質問番号④「課題解決に必要な情報・資料」に記述された文章中における出現回数上位 20 位の語彙

位	語彙	出現回数	位	語彙	出現回数
1	実践	58	10	思う	8
2	例	51	10	情報	8
3	資料	20	13	教員	7
4	具体	15	13	個別	7
5	授業	14	13	最適	7
6	支援	11	13	事例	7
7	学び	10	17	研修	6
8	指導	9	17	考える	6
8	方法	9	17	時間	6
10	ICT	8	17	実態	6

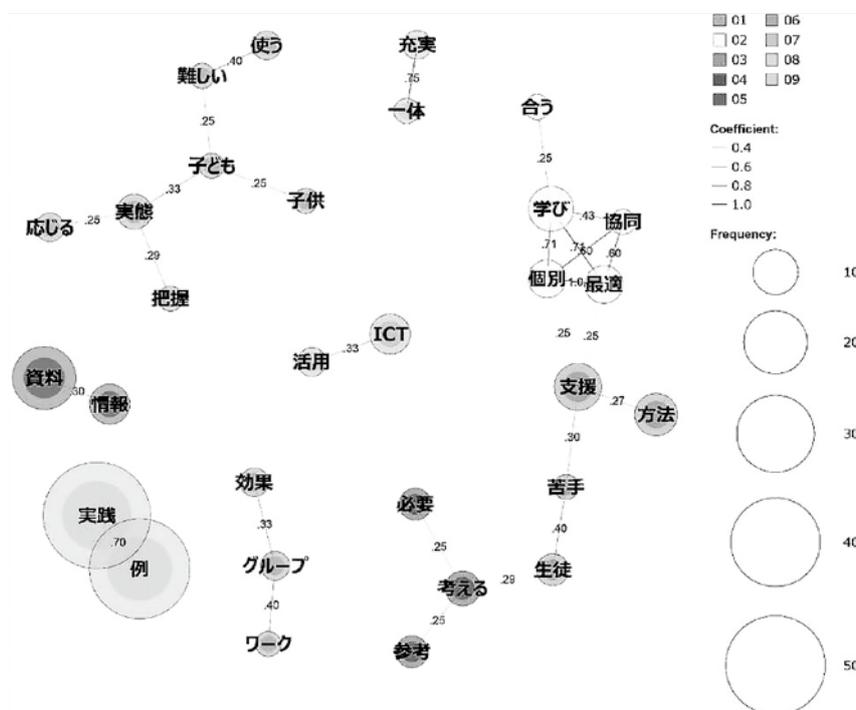


図 5 質問番号④の回答に記述された語彙の共起ネットワーク図

図 5 を見ると、「実践」「例」の上位 2 つの語彙が、群を抜いて出現回数が多く、次いで「資料」「具体」「授業」と続いている。

図 5 の共起ネットワーク図（KH Coder）は、抽出語彙数を上限 30 として出力したものである。また、共起関係の強弱については、線の太さと係数（Jaccard 係数）で示している。

まず、表 4 において出現頻度の多かった、「実践」「例」という語彙と、図 5 の共起関係を関連させながら見ると、「実践」と「例」という語彙は強い共起関係にあり、いわゆる「実践例」と

いう言葉で多く表現されていることがうかがえる。したがって、課題解決に必要な情報・資料として、「実践例」を求める傾向が強いことが明らかとなった。

本調査結果から明らかとなったことを次にまとめる。

- ・浜田教育センターの作成した成果物は、県内全学校に配布を行ったが、約75%の教職員が「見たことがない」と回答した。
- ・浜田教育センターの作成した成果物以外に求める情報としては、実践例が多かった。
- ・個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を進める上での課題として、個別最適な学びの視点で生徒の実態を把握することや、実態をもとに個別最適な学びの視点で授業設計することに対して、難しさを感じている傾向が強い。
- ・同様に、教材研究や教材準備をする時間を確保することに対して課題と感じている傾向が強い。
- ・上述の課題に対して、解決するために必要だと考えている情報・資料として、「実践例」を求める傾向が強い。

以上の結果から、本研究で作成する校内支援プログラムは、次に示す要素を取り入れたものを作成する。

- 短時間で校内研修を行うことができるように、カテゴリーに分けた短編動画を数本作成する。
- 校内の教職員で研修が進められるように、動画を用いた研修の進め方の例を示す。
- まとまった時間（60分～120分）での校内研修にも対応できるように、各短編動画を貫く研修パッケージ（動画ガイド）を作成する。
- 実践事例を取り入れる。但し、指導案を提示すると、いわゆる“型”に見える誤解があるため、子どもの姿を軸とした学びの場面の例を提示する。
- 事例において、個別最適な学びの視点で子どもの姿を捉える例、個別最適な学びの視点で授業を設計する例を開発し提示する。

なお、研究成果物をより多くの教職員に見てもらえるように、Webサイトを活用した資料配布を検討するとともに、広報活動も継続して行うこととする。

### （3）校内支援プログラム「動画ガイド」の製作

#### ① 作成の基本方針

令和4年度までの研究で「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」に向けて、学校が自走できるように成果物の作成を行った。そして、成果物を用いてそれぞれの学校のやり方で校内研修を進めてもらうことを「自走」と考えていた。しかし先に述べたアンケート調査から、学校の現状としては、他に優先すべき事柄もあり、研修の機会を生み出すことも難しいことが見えた。実践事例へのニーズが多いことも踏まえ、各校が負担なく学校教育目標やめざす子どもの姿に向け「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」の視点を取り入れた授業づくりを進めるためにも、学校全体や個人がそれぞれの実態に合わせ、何らかの媒体を用いて負担なく取り組めるような校内研修への支援が必要だと考えた。各校が、目指す子どもの姿に対して我々の提案する媒体を活用しながら実際に議論を重ねる、これが我々が考える「自走」である。

そこで、本研究で作成する校内支援プログラムの具体として、「動画ガイド」を作成する。このことで表5のようなメリットが考えられる。

表5 動画によるガイドのメリット

- ・音声解説をつけることによって、出前講座と同程度の効果を期待できる。
- ・写真や動画を取り入れたスライド画面を取り入れることで具体的に伝えることができる。
- ・繰り返し視聴することができる。
- ・チャプターによるパーツ化を図ることで、短時間で部分的に視聴することができる。

「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」に関する理解ができるとともに、明日からの授業実践にすぐつながるものにしたいと考える。また、授業の具体についてもイメージできるよう、実践事例を取り入れていく。ここでは充実ナビの活用例についても示し、教師がその視点を通して自身の授業を見つめることで、これまでの授業の工夫に気づき、さらなる授業の工夫へとつなげることができるようなものにしたいと考える。

校内支援プログラム「動画ガイド」の作成の基本方針を以下のようにまとめた。基本方針に沿って動画ガイドを作成することで、それぞれのチャプターに一貫性を持たせるようにした。

#### ア わかりやすいもの

実態調査アンケートの結果から、教職員は実践例を求めていることが明らかとなった。これは、個別最適な学び、協働的な学び、それらの一体的な充実が図られた授業をイメージをすることが難しいとも言える。そこで、この動画ガイドでは、授業をイメージしやすいように写真やイラストを多く用いる。また、チャプター項目の一つとして、授業の具体を示している。その他、例を示すことでより理解を促したり、考えるきっかけとなったりすることを目指す。

#### イ 簡単な言葉で解説

出前講座「Well-being な生き方を目指して～個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実～」の事後アンケートから、出前講座には「指導主事による簡単な言葉での説明」「学校全体での共通理解」といった利点があることがわかった。この出前講座の良さを今回の動画ガイドにも取り入れ、さらに、動画ガイドで用いる言葉は、教職員にとって理解しやすいものとなるように配慮する。

#### ウ 動画視聴後のアウトプットの機会の設定

それぞれチャプター動画の途中や最後には、わかったことや気づいたことを自分の言葉として外化する機会を設ける。それぞれの教職員が動画視聴をして学びとったことを、言語化することによって整理され、学びを自覚できる。また、教職員が協議をすることで、考えを共有したり意見や計画を調整してまとめたりすることができると思う。

#### エ 研修が進められるもの

校内研修等の実施について十分な時間の確保が難しいといった課題を踏まえ、校内研修等を想定した動画ガイドとは別に、それぞれのチャプターをパーツ化することで、限られた時間の中であってもミニ研修が実施できるように設計した。それぞれの学校や個々の状況に応じて選択でき、教職員が自分たちで研修を進めることができるようにした。また、動画にすることで繰り返し視聴することができる。個別に動画を視聴した上で校内研修を行えば、時間の大部分を協議する時間として確保することも可能である。

以上より、講義視聴場面となるチャプター①～⑤と、校内研修場面となる①～③のセクションで構成することとした(表6)。

表6 研修動画ガイドの構成

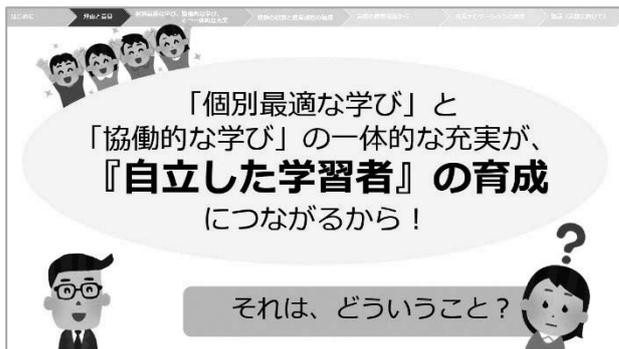
校内研修セッション①		はじめに
講義	CHAPTER 1	「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を図ることが求められている理由と背景
	CHAPTER 2	「個別最適な学び」「協働的な学び」「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」の理解
	CHAPTER 3	教師の役割と教育課程の編成
	CHAPTER 4	授業事例から子どもの姿をイメージする
校内研修セッション②		協議①
講義	CHAPTER 5	充(10)実ナビゲーションの活用
校内研修セッション③		協議②

次に各CHAPTERについて述べる。

② CHAPTER 1 「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を図ることが求められている理由と背景

ア 本CHAPTERの作成にあたって

これまでの成果物においても、また、出前講座においても、「個別最適な学び」と「協働的な



学び」の一体的な充実を図ることが求められる理由と背景について必ず説明をし、その必要性や意義などを確認してきた。今回の校内研修動画ガイドにおいても、「なぜ、個別最適な学びや協働的な学びが求められるようになったのか」という問いに対する答えとして、本CHAPTERを設けている。そして、求められる理由についてはできるだけ端的に示すことで視覚的な理解しやすさを用いている(図6)。

図6 なぜ、今「個別最適な学び」や「協働的な学び」が求められているのか

イ 本CHAPTERの内容

「個別最適な学び」や「協働的な学び」が求められている理由として、現行の学習指導要領のキーワードである「主体的・対話的で深い学び」の実現につながることを示した。今の子ども達が生き抜かなければならないこれからの社会が「予測困難な時代」であることから説明をはじめ、「個別最適な学び」「協働的な学び」の視点を取り入れた授業づくりが主体的・対話的で深い学びにつながり、子ども達の身に付けたい資質・能力が育まれていくことを伝えるようにしている。

未来に対応するために重要なこととして、令和答申では子ども達に育むべき資質・能力とそれにおけるポイントを表7のように示している。

表7 子どもたちに育むべき資質・能力とそれにおけるポイント

一人一人の児童生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが必要である。

チャプター内での説明においても触れたが、ここで確認しておく。未来を生きる子ども達に対して求められるものは、学習を受け身で考えるのではなく、高い志と意欲を持って自ら学びをつかみにいくことである。そのため、学校教育では他者と協働しながら学びを広げ新たな価値を生み出していく能力の育成が今まで以上に必要となる。そして、多様な一人一人の子ども達が、自立した学習者として学び続けていけるようになることが最終的なゴールである。

本チャプターでは、「個別最適な学び」や「協働的な学び」が求められる理由や背景の根本的

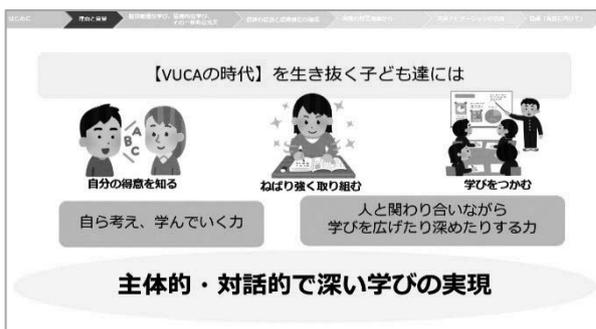


図7 短い言葉で示されたチャプター

な理解が目的である。詳細な説明は音声による説明でのみ行い、実際の画面には図7のように短い言葉やキーワードのみを示し、文字言語による情報が多いことが、インプットする意欲を下げってしまうことにも配慮し、短い言葉での表現にアニメーションなどを用いている。順を追って理解できるように見ることで理解が促進されるように留意した。

③ **チャプター② 「個別最適な学び」「協働的な学び」「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」の理解**

ア 本チャプター作成にあたって

- ① チャプター作成の基本方針を受け、「何のために」すなわち令和答申の目的を踏まえつつ、ここでは「個別最適な学び」「協働的な学び」の理解と確認へ進みたい。ここでは、本研究の中心的キーワードとして存在する「個別最適な学び」「協働的な学び」「一体的な充実」について、ルートマップに示された語をベースに別の形に置き換え示した。

イ 本チャプターの内容

i) 個別最適な学びに関する提示

学習時間、指導法、教材などを、その子の学習適正に最も適合するように調整することを学習指導の「最適化」という。「個別最適な学び」の「最適」はここから来ている(奈須 2023)。

令和答申では個別最適な学びを図8と説明し、「指導の個別化」と「学習の個性化」の2つ

<p>&lt;指導の個別化&gt;</p> <p>一人一人の<u>学力や特性に合わせて、子供が学習内容や学び方を選択し、基礎・基本となる知識や学び方を身に付ける学び。</u></p>	<p>&lt;学習の個性化&gt;</p> <p>一人一人の<u>興味・関心や必要性に合わせて、自ら学習を発展させ探求していく学び。</u></p>
---	--

図8 指導の個別化と学習の個性化について

の側面があることを示している。前研究の追跡調査からは「これまで以上に個々への対応を強調した授業展開にせねばならないのではないか」といった過度の負担を感じる傾向が見られた要因の一つとして、線部への着目があった



図9 学習のゴール(ねらい)に向かって学びをつかむ思考のイメージ



図10 「学びをつかむ」と強調し ICT 活用も不可欠な要素として取り入れた思考のイメージ

ば、いずれも「児童生徒がどのように学びをつかむのか」と翻訳できる。そこで、あえて「学びをつかむ」と強調し説明した。その上で「様々な方法・ペースで身に付ける」「自分の得意を見つける・広げる」と示し、ICT活用も不可欠な要素として取り入れた。

## ii) 協働的な学びに関する提示

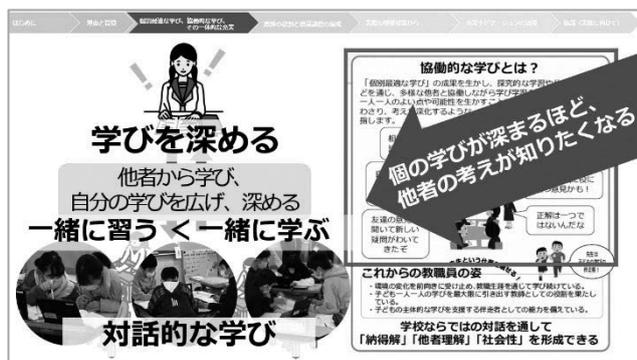


図11 「学びを深める」を強調した「協働的な学び」の思考のイメージ

「協働的な学び」を展開する上で重視したいのは、異なる考えが組み合わせたり、よりよい学びが生み出されるような授業展開にすることであり、ここでは正解ではなく子どもの中に納得解や最適解が生み出されることに着目したい。協働とは「複数の主体が何らかの目標を共有し、共に力を合わせて活動すること、共に働くこと」を意味する。また、奈須(2023)は「一斉授業=協働ではない」と言及している。

「一人ではやりきれないことや深まらないことがあるから必然的に協働する。協働する前に必ず独自学習があって、煮詰まってきたら協働する姿がある」とも述べている。このことから、単に席や空間を同じくし学習するだけではなく、まず自分の考えを持ち、その考えを追究すれば友達の考えはどうだったのか、自分の考えが果してそれで合っているのか、といった生成された欲求から生まれる対話的な活動を通して自分の学びを広げ深めていく、これが協働的な学びであることを強調し構成した。

### iii) 一体的な充実に関する提示

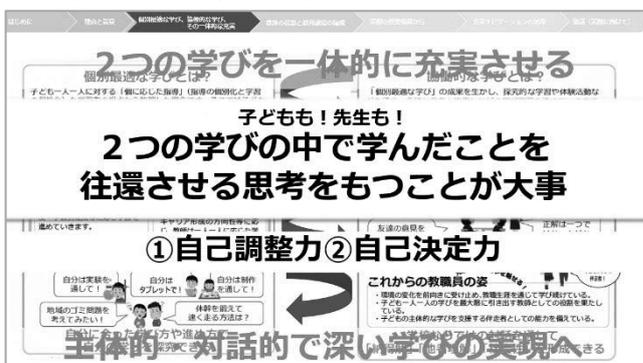


図12 「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実に関する思考のイメージ

図12は、決して個別最適な学びが孤立した学びに陥らないようにするために協働的な学びが存在するわけではないことを、念頭に置き、デザインしている。ルートマップでは、「子どもも先生も2つの学びの中で学んだことを往還させる思考を持つことが大事」と示している。ということは個別最適に学んだことを協働的な学びの場で広げ深めること、つまりは2つの学びは別々に存在

しつつもそれぞれが繋がっていることが見えてくる。また、協働的な学びで広げた資質・能力を再度個別最適に学び、深めていく子どもの姿にも繋がっていくのである。2つの学びを一体的に充実させる視点として、単元や題材といった枠組みでとらえることがポイントとなる。2つの学びの往還は、決して一授業の中だけで完結するものではない。どちらの学びも「どの場面で取り入れると子どもたちがもっとも適切に学べるのか」の視点で考えたい。この考え方は「主体的・対話的で深い学び」の実現と同じである。

## ④ チャプター3 教師の役割と教育課程の編成

### ア 本チャプター作成にあたって

では、上述の授業場面において教員はどのように役割を果たすべきなのか。その役割の存在だけでなく、一人一人の学習指導や学習内容に応じた対応や、個々の得意を探せる教育課程、また協働して課題解決できる教育課程そのものも必要であろう。その場面においては、基礎学力の定着を全ての子どもに補償することはこれまでと同様変わらない。子ども達は基礎学力の定着が補償された学習環境の中で、自分の得意を知り自分自身で学ぶ力を育てていく。これが、これからの授業の姿だと言え、それを実現するのが教師の姿だと捉えたい。そこで本チャプターでは、教師の役割を「個別最適な学びや協働的な学びを充実させるための学習環境をつくること（学べる環境を創る）」とし、「学びのコーディネーター」と提示した。さらに、教育課程の編成についても触れ、ポイントを絞って提示している。

## イ 本チャプターの内容



図 13 これからの教師の姿のイメージ

図 13 はこれからの教師の姿を示したスライドである。画面下部には学校における教育の方向性を「自分の得意を知る・自ら学ぶ力を育む」「基礎学力の定着」の2つから示し、そのための教育的枠組みを5項目に絞り提示した。2つの方向性が学べる環境を創ることへつながるための具体的方策として「動機付け」「学習方略の提案」「より一人一人へ」「共に学ぶ・見守る」の4点を位置づけている。それらを包括する形で「コーディネーター」という枠組みで

提案することとした。コーディネーターとは「いろいろな要素を統合したり調整したりして、一つにまとめ上げる係。また、そういう職業。」を示す。令和答申においても、実現すべき教師の姿について「教師が技術の発達や新たなニーズなど学校教育を取り巻く環境の変化を前向きに受け止め、教職生涯を通じて探究心を持ちつつ自律的かつ継続的に新しい知識・技能を学び続け、子ども一人一人の学びを最大限に引き出す教師としての役割を果たしている。その際、子どもの主体的な学びを支援する伴走者としての能力も備えている。」と言及されている。

コロナ禍以前以後で変わったこと、それは教育のDX化である。コンピュータやAIドリルを活用してすすめる授業が県内各校で見られるようになった。だからこそ、今まで以上に、一人一人に対して、やる気を向上させるような声掛けを行うことで動機付けを行ったり、どのような方法で覚えれば記憶することができるのか、どういった方法だと理解することができるのかなど、一人一人に応じた指導ができたりするようにもなった。ここから「では我々の“教える”仕事は必要ないのか」との声もある。決してそうではなく、i)～iii)で示した学びの実現のためにも「教えるべきは教える」ことは必要であると考え、吹き出し内に提示している。



図 14 「個別最適な学びや協働的な学びの場面」の設定に関するイメージ

続いて、何をどれだけ変えればよいのか、教育課程を編成する上でのポイントを図 14 として提示し、その解決を図った。i)～iii)でも述べたが、今の授業を全て変える必要はないと考える。これらの実現に関しては「まず2割」を変えるだけで学校が変わると奈須(2023)は述べている。では、どこで「個別最適な学びや協働的な学びの場面」を設定するのだが、端的に言えば、子ども達が学べる場面で設定するという事だろう。教師が教える内容を一人一人じっくり向き合う場面はどこなのだろうか、さらに学習を深めていくこのタイミングで協働的に対話的に学ぶ場面を設定することで学びが深まるであろうといった場面を考える。

これは、普段から子ども達の実態を充分捉えている先生であれば場面設定は容易に想像できるはずである。図 14 では、学習指導要領が目指す理念に基づき、授業の目標を目指す姿に向かう

ことを前提としたイメージで提示した。また、ここで重視したい3点を画面下部に示して強調している。

## ⑤ **CHAPTER**4 授業事例から子どもの姿をイメージする

### ア 本CHAPTERの作成にあたって

本CHAPTERは、教師が「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」について、授業場で実践のイメージをもち、自身の実践に結びつけて考えるきっかけになることを目的として作成している。

### イ 本CHAPTERの内容

本CHAPTERの流れは、表8の通りである。

表8 CHAPTER4の流れ

- |  |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"><li>i) 授業映像や写真をもとに、子ども達の「個別最適な学び」「協働的な学び」「それらの一体的な充実」の姿についてイメージをもつ。</li><li>ii) 1時間の学習過程を例に、どこの場面に、どのような「個別最適な学び」「協働的な学び」またそれらの「一体的な充実」を取り入れることができるかを知る。</li><li>iii) 自分の担当する教科で、「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」を取り入れられそうな場面を考える。</li><li>iv) 考えた場面を共有し合う。</li></ul> |
|--|

次に、それぞれの内容と作成の意図について記述する。

#### i) 授業映像や写真をもとに、子ども達の「個別最適な学び」「協働的な学び」

「それらの一体的な充実」の姿についてイメージをもつ

i) は、教師が、本テーマを実現している子どもの姿を思い描けることをねらいとしている。「授業実践」ではなく「子どもの姿」という形で紹介するのは、本テーマの実現は授業形態やスタイルという手法の普及を目指すものではなく、子ども達を主語にした「めざす子どもの姿」を共有したいという願いからである。

提示する映像や資料は、例えば、表9のようなものである。

表9 めざす子どもの姿、教師の役割

- |  |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"><li>A 教室全体を見渡すと、様々な学びの姿が同時進行で見られる様子</li><li>B 教科書、タブレット、学習プリント等で学ぶ子どもの姿</li><li>C 一人で学ぶ、友達と学ぶ、先生と学ぶ等の子どもの姿</li><li>D 自立した学びを支える教師の役割としての「学習環境」「関わり方」</li></ul> |
|--|

Aは、子ども達が自分に合った学習を選択し学習を進めていく重要性を理解できるよう、授業の一場面において、同時進行で様々な学びが見られる様子を取り入れている。なお、このような教室での子ども達の学びの姿は、「複線型の授業」とも言われるが、授業風景の一つの事例であり、本テーマ実現の姿の全てではない。(図15)

B、Cは、子ども達が「何を学ぶのか」「誰と学ぶのか」「何を学ぶのか」など、学習内容や学習方法を選択できる学習機会を保障し、子ども達自身が選択したり（自己決定）、それらの学びを振り返りながらその時々が一番よい方法に変更したり（自己調整）しながら、学びを進めていくことの大切さを伝えている。また、友達や先生と学ぶ場面は、「協働的な学び」の姿としても紹介している。

子ども達が必要に応じて多様な他者との対話を通して学びを深めていくことは、個々の個別最適な学びを実現していくうえで必要不可欠な要素であることも、研修の中で押さえない。（図16）

Dは、教師の役割として、学習環境づくりについて取り上げた。例えば、子ども達の主体的な学びの姿を実現するために、子ども自身が学習の見通しをもつこと、学びを振り返り、自身の学習内容や学習方法についての成長や課題に気づき、次の学びに生かすことの大切さを伝えている。（図17）

ii) 1時間の学習過程を例に、どの場面に、どのような「個別最適な学び」「協働的な学び」またそれらの「一体的な充実」を取り入れることができるかを知る

ここでは、子ども達が自己決定や自己調整を繰り返しながら学びを進める姿を、本テーマが実現された姿と捉え、小学校第3学年理科「昆虫と植物」の授業事例を元に、どの場面にどのような学びの機会を設定するかを考える。なお、ここで示す授業事例も、あくまで「子どもの姿」をイメージするための一例であることを確認したい。

実際の授業事例についての詳細は割愛するが、図18のような流れで計画を立てた。1時間目の学習である昆虫の体のつくりを知り、2時間目の学習で複数の昆虫の体のつくりを比較し共通性を見つけることで、昆虫の体のつくりを理解するという流れである。



図15 多様な学びの姿



図16 選択できる学びの環境



図17 教師の役割

実現している子どもの姿のイメージ（一例）

小学校3年 理科 昆虫と植物

ねらい

成虫の体は頭、胸及び腹からできていること。

※ 昆虫の体のつくりについては、複数の種類の昆虫の体のつくりを比較して観察し、共通性があることをとらえるようにする。（学習指導要領解説 理科編）

1時間目 ありの体のつくりを観察して、体のつくりを知る。

・ありの体は、「頭・むね・はら」に分かれていることがわかった。  
・むねから足がら本でていた。

2時間目 他の昆虫も「頭・むね・はら」に分かれているか確かめる。

(1) 他の昆虫も同じように「頭・むね・はら」に分かれているか確かめ、  
(2) 共通性を見つけ、  
(3) 昆虫の体のつくりを理解する授業展開としています。

図18 学習のねらいと学習計画

本事例（図 19）は、「課題設定」「問題解決」「整理・分析」「まとめ・振り返り」の様々な学習過程に、自己決定や自己調整の機会を設け、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を繰り返す中で、子どもの学びが深まっていく様子を表している。

本事例を、理科の授業としての一事例という捉えではなく、どの教科にも見られる学習過程での子ども

達の姿と捉えてもらえるよう配慮したい。また、学習過程のどの場面で、どのような子ども達の自己決定、自己調整の姿が見られるかを想定する演習の時間をとることで、目の前の子どもや自身の教科等に結びつけて考えることができるようにしている。

なお、本事例はこれまでの実践が否定されるものではなく、より充実させるためのきっかけであると捉えてもらいたい。そこで、表 10 の内容について押さえておく。



図 19 本テーマを実現している子どもの姿の例

表 10 本テーマの実現に向けて、教師として押さえておきたいこと

<p>a. これまで1つだった選択肢が2つ、3つに増えるだけでも子どもの自己決定や自己の機会は確実に増えること</p> <p>b. 様々な場面に、自然発生的な協働や意図的な協働が生まれるよう、学びの環境をつくったり自由度を高めたりすること</p> <p>c. 子ども自身が自分に最適な学びを進めるために自己決定や自己調整を行っているという自覚を持つこと（教師も子どももその大切さを自覚すること）</p>
---

iii) iv) の取組については、全体の演習と重なるため、ここでは解説を省略する。

本チャプターにおいて、「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」の実現を子どもの具体的な姿でイメージすることは、教師の授業づくりや環境づくりのヒントになると考えている。学習における子どもの自己決定や自己調整の機会が増え、子ども達が自立した学習者として成長していくことを期待したい。

## ⑥ チャプター5 充 (10) 実ナビゲーションの活用

### ア 本チャプターの作成にあたって

チャプター1～4までの内容で、個別最適な学び、協働的な学び、それらの一体的な充実を図りながら授業づくりに取り組むことを中心に扱っている。このことを受け、本チャプターでは、より具体的な授業の場面を例示し、授業に取り入れる際のヒントとして提案する。

本チャプターでは、充 (10) 実ナビゲーションを取り上げ、3つのルート（ルート7「これからの教師の役割」、ルート4「自ら学び、考え行動できる力の育成」、ルート1「ICTを活用して家庭学習の充実を！」）の具体事例を紹介する。動画内では、内容が伝わりやすいようにできるだけ簡単な言葉を用いるようにした。また、様々な教科で参考にしてもらえるように、問題解決的な学習の過程に沿うような場面を取り上げた。

ヒントを紹介するにあたっては、家庭科をイメージして動画を作成している。家庭科を選んだ理由は、すべての校種で扱っている教科であること、そして家庭科の学習過程が問題解決的な学習の流れそのものであるということからである。

## イ 本チャプターの内容

### i) ルート7「これからの教師の役割」

まず、問題解決的な学習における学習過程の既存の知識・技能を学ぶ場面として、ルート7「これからの教師の役割」をヒントに具体例を提案する。

図20の枠（どのように子どもと向き合うの？）にある子どもの側で子どもの視点に立ち、学びの伴走者として教師が子どもに学びの自覚、興味・関心を促し、高めるような問いを投げかけるところから、授業が展開される流れとした。例えば、図21のように、子どもにとって身近な存在である給食を題材に取り上げることで、学習のスタートラインが整った状態で学習を始めることができる。子どもにとって興味・関心が高い“ひと・もの・こと”のリサーチにより、学習へ誘うことは教師のファシリテートの部分の一つである。

教師の問いに対し自由に自分たちの意見や考えを出す。その後の学習活動においては、子どもから出た意見や考えを取り入れながら展開していく。教師が子どもの学びをつなげていくことで、学習に対する主体的な取組につなげるのである。子ども達は学びの文脈の中で生きている。1時間単位ではなく、単元全体の子どもの思考を踏まえ、授業展開を検討したいのである。

教師の問いに対し自由に自分たちの意見や考えを出す。その後の学習活動においては、子どもから出た意見や考えを取り入れながら展開していく。教師が子どもの学びをつなげていくことで、学習に対する主体的な取組につなげるのである。子ども達は学びの文脈の中で生きている。1時間単位ではなく、単元全体の子どもの思考を踏まえ、授業展開を検討したいのである。



図20 ルート7「これからの教師の役割」

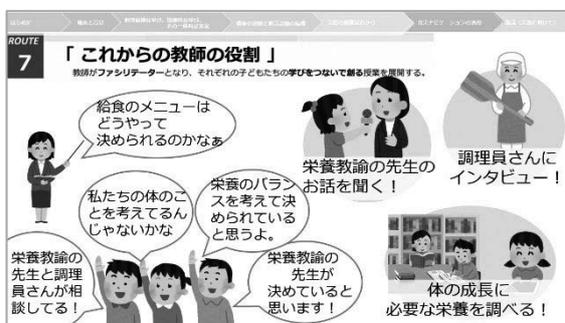


図21 教師からの問い・ファシリテート



図22 学びの共有

次に、それぞれの学習活動を終えた子どもの学びをグループで共有する(図22)。子どもは自分の学んだことを他者に伝えることで、より深い学びに向かうことができる。また、他者の視点を得ることで学びの視野が広がり、学習への欲求や探求にも繋がるのである。これは協働的な学びの側面である。このような学習活動場面において、教師は子どもの学びへの欲求を実現させるファシリテーターとなることが大切である。

### ii) ルート4「自ら学び、考え行動できる力の育成」の内容

ルート7を受け、問題解決的な学習における学習過程のヒントとして、次にルート4「自ら学び、考え行動できる力の育成」につなげていく。図23の枠内（どのように取り入れるの？）

①問題・課題を設定し、決定する場面についての提案である。

子どもの既習（ここでは「給食の献立立案からの学び」）から、自分たちが考えた方法で学んできた子どもは、学んだことを生かしたいという気持ちが高まっていると考える。そのような子どもの実態を踏まえ教師が課題を設定する場面（図24）を想定し、教師がねらいに向かって自己選択や自己調整できる場面を取り入れつつ、手立てや条件を整えていくことが大切になってくると考える。このような学習活動を適宜取り入れることにより、課題解決への意欲を高め、自ら問題を発見し解決する能力を養うことができると考える。



図23 ルート4「自ら学び、考え行動できる力の育成」

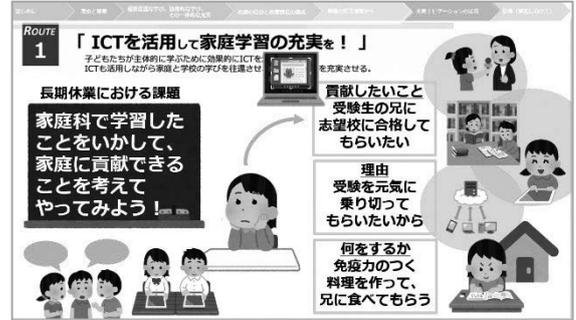


図24 問題・課題を設定し、決定する場面の例

### iii) ルート1「ICTを活用して家庭学習の充実を！」の内容

ルート1「ICTを活用して家庭学習の充実を！」の具体例として、図25の枠（どのように取り入れるの？）にある「授業の学習とつなげる工夫」に着目して提案している。ここでは問題解決的な学習において、その学習過程をより発展的に問題解決して学ぶ場面を想定した。まず、学校で、一人で考えたり、タブレットを使ったり、友だちと意見交換したりしながら課題解決に向けた活動を行う。学校で課題解決に向けた学び方や考え方を十分に体験した上で、家庭における課題を見つけ自己課題として設定し長期休業中の学びにつなげるのである。スライドでは「受験を控えている兄に免疫力のつく献立を考え、調理する」自己課題として設定している（図26）。家庭科の見方・考え方を働かせながら、自分で立てたミッションを、自分なりの解決方法で解決していこうとする。長期休業中の家庭学習課題を提示した場合、他者の学びを知らないまま活動が進むことも考えられる。そこで、課題のスライドをクラウドに保存しておくことで、他の人たちのスライドを参照することができるようになり、お互いの進捗を確認できたり、参考にできたりすることで、子ども達の学びの幅が広がると考えられる。これはやがて学校での学びにつながることを意識した展開を提案している（図27）。このように家庭にいながらも他者の学びを共有したり互いに相談し合ったりといったクラウドの利活用方法も提案している。



図25 ルート1「ICTを活用して家庭学習の充実を！」

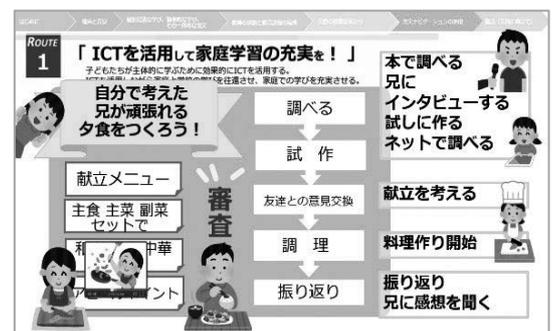


図26 家庭一学校での活動

## ⑦ 校内研修セッション

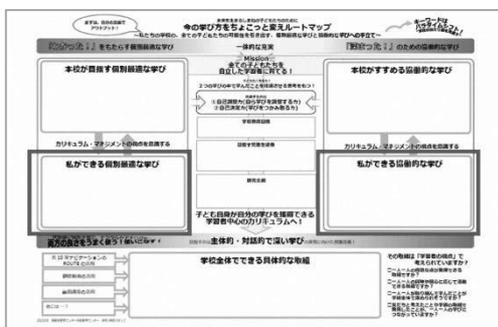
### ア 本セッションの作成にあたって

本セッションは表6で示したとおり、以下表11の3つの場面を設定し作成している。

表11 校内研修セッションの3つの場面

校内研修セッション①	はじめに・・・動画の説明・学校経営目標等の記載・現状把握
校内研修セッション②	協議 ①・・・私ができる個別最適な学び・協働的な学び
校内研修セッション③	協議 ②・・・本校が目指す個別最適な学び・協働的な学び

ここでは作成の基本方針に従い、協議の時間を設け、各校で研修を進めることができることを目的に作成した。動画ガイドを見ながら校内研修を実施することで、学校全体として共通理解を図ることができる。協議時間は、学校の実態に合わせて調整し取り組むことも可能である。また、表6に示したチャプター順で研修を進めていくこととし、概要的な部分から徐々に具体へ焦点化する流れとした。



(i) 私ができる個別最適な学びと協働的な学び



(ii) 本校が目指す個別最適な学びと協働的な学び



(iii) 学校全体でできる具体的な取組

図27 ルートマップとワークシートの活用の仕方

- (i) 私ができる個別最適な学びと協働的な学び
- (ii) 本校が目指す個別最適な学びと協働的な学び
- (iii) 学校全体でできる具体的な取組

### イ 本セッションの内容

セッション①は、研修の導入である。動画の説明に加え、ワークシートに学校経営目標や目指す子ども像を記入し、学校で何をを目指すのかを明確にする。セッション②、③はすべてのチャプターの理解がなされた上で動画ガイドを視聴し研修を進めることを想定して作成している。よって、ここで目指すのは「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」に関する理解と、それらの視点を取り入れた授業づくりのイメージの共有となる。また、このセッションのみであれば協議時間を含め約30分を想定しているが、すべてのチャプターを丁寧に視聴し、各セッションの協議も行うことを想定すれば、約120分程度の時間が必要となる。

例えばセッション③では、ルートマップと同時に配布したワークシートを用いる。また、動画を視聴した教職員の思考の流れに沿う形で「(i) 私ができる個別最適な学び、協働的な学び」→「(ii) 本校が目指す個別最適な学びと協働的な学び」→「(iii) 学校全体でできる具体的な取組」といった流れで研修を行う。視聴者は、チャプターの構成と照らし合わせながら、まず自分の授業をイメージするだろう。その上でカリキュラム・マネジメントの視点も踏まえながら、学校組織での取組につなげて考えてほしいためである。また、「個別最適な学び」と「協働的な学び」が別々に行われるものではなく、実際の授業の中では個別最適な学びを進める子どもが

いれば、協働的な学びを進める子どももいるなど、関連が強く一体であることを強調している。

以上、各チャプター作成の意図と具体的内容について述べたが、まとめとして図 28 の場面を取り入れた。今回の動画は「校内研修で活用する」ことを想定しているため、各チャプターでとらえたイメージを文字言語や音声言語として表出し、研修時に共有することでOJTを図りたいためである。また、チャプターごとのスライドについては、使用する言葉をなるべく簡単に伝えることを念頭に置いて作成している。だが、言葉を簡単にすればするほど吟味



図 28 各項目・スライドセクションのまとめ

される側面もあれば真に必要な情報が伝わらない場合もある。よって、令和答申の語を基盤に作成したルートマップを踏まえ、理解を促す研究場面への活用を提案したい。

#### 4 研究のまとめ

本研究の目的は、各学校が「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を図っていくためのきっかけとなるように、令和4年度に配布した研究成果物を用いた校内支援プログラムを提案することである。そのために、我々はアンケートによる実態調査を行い、その結果を踏まえ校内研修動画ガイドの作成を行った。作成に対して実態調査を受けた動画の構成等を以下にまとめる。

- アンケートによる実態調査から、浜田教育センターの作成した研究成果物以外に実践事例を求めていることが明らかとなった。また、実践に取り組もうとしている学校の中には、個別最適な学びの視点で生徒の実態を把握することや、実態をもとに個別最適な学びの視点で授業設計することに対して、難しさを感じている傾向が強いことが明らかとなった。
- 校内研修動画ガイドは、4つの基本方針（わかりやすいもの、簡単な言葉で解説、動画視聴後のアウトプットの機会の設定、研修が進められるもの）のもと、校内支援プログラムを作成した。チャプターとして取り上げる内容は、実践事例だけでなく基本的な概念理解も必要であると考え盛り込んでいる。
- 教材研究や教材準備をする時間への負担感に加え、新たに何かを行わなくてはならないのではといった不安を払拭したい。そこで、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を図った授業の実践事例を写真や動画を取り入れてチャプターの一つとして作成した。同時に「充(10)実ナビゲーションを活用した授業づくりの例」を示すことで、活用する方法も解説する機会を得た。
- 校内研修動画ガイドのチャプターは概ね5～20分程度の時間で作成されている。チャプターというパーツ化を図ることで、学校の実情に応じて様々な使い方ができる。このことで限られた時間であっても研修が可能となった。

個別最適な学び、協働的な学び、さらにその一体的な充実を図るためには、指導者のファシリテートする能力がカギとなる。そのことをわかりやすい内容として伝えようとするれば、子ども達の学びの姿に置き換えて語るが必要となる。また、教師がファシリテートするためにも、教師には子ども達がどのような状態でどこに向かっているのか、どんな資質・能力を発揮しているのか、見ようとして見る意

識も求められる。そのためにも、ICT を活用するなどし、子ども達一人一人の学びが保証され、全体への学びに活かされるように授業を作っていく力も必要である。

今後は、これまで浜田教育センターの作成した研究成果物を含め、今回提案する「校内研修動画ガイド」の周知も行う。このことでより一層各校での自走を促したいと考えている。

先に述べたように、各校が、目指す子どもの姿に対して我々の提案する媒体を活用しながら実際に議論を重ねる。これが我々が考える「自走」である。これまで浜田教育センターが配付してきた研究成果物は、校内で機能していなかった。「自走を促すこと」を考えれば、学校の実態を一層考慮し、学校が一步踏み出し走り出すところまでをサポートする。これが教育センターの目指す姿ではないだろうか。さらには、出前講座だけでなく、教育センターにおける研修や講座で活用し、配布物を使っていただく機会も設定する。今後も学校をアシストする形を模索しつつ提案を行っていききたい。

## 5 おわりに

過去、「カリキュラム・マネジメント」「教科等横断的な学び」を中心に調査研究を行っている。両研究とも、子ども達が進んで学びと学びをつなげ新たな学びを生み出す、知識を統合して活用する姿を目指すことを念頭に置き研究に臨んだ。だが、そこには「指導者」の目線で考える教育課程や学習へのアプローチはあっても、子どもの思考は置き去りになってはいないのか、もしかすると真に考えられていないのではないのか、このようなもやもやとした「思い」もあったのも事実である。そのような問題意識を持っている中で「個別最適な学びと協働的な学び」に出会うのである。

子ども達自らが知識と知識を統合し、問題を解決する力を自分自身でつかみ取ること。これこそが浜田教育センターで行っている研究の軸ともいえる教育観である。

子どもには多様性がある。「うちの学級にはいろんな子どもがいますから」と言いつつも、いろいろな子への対応が十分ではなく、教科書を終えることに重点をおいている授業はなかつただろうか。もしかすれば、そのやり方にも無理があったのかもしれない。教師の中に授業のストーリーがあり、そこになじまない登場人物は「その他」のキャストに他ならない。だが、子ども達一人一人に学びのストーリーがあるのである。当然主人公は子ども自身だ。主人公のペースで物語は展開されていくし、そうでなければならないと強く願う。

さて、令和答申は“新学習指導要領の着実な実施”が重要であり、「指導者側の視点からの『個に応じた指導』を学習者の視点から『個別最適な学び』と言い換え、これまで以上に一人一人の学び手に寄り添った取り組みをすすめていく」と提言している。「新」はすでに次を迎えている。次期学習指導要領改訂に向けてすでに動き出している。1人1台端末が配られて初となる改訂であることを考えれば、これまでと同じではないことは容易に想像できる。コロナ禍以前以後で変わったこと、それは教育のDX化である。コンピュータやAIドリルを活用してすすめる授業が県内各校で見られるようになった。時間や空間軸を超え情報共有した授業展開が可能となったのである。このような中で、教師が黒板に示した問題を一斉に解き、何分後かに手を止めさせ、わからないことを隣同士で教えあうような授業であつてよいのだろうか。手を止めずに進みたい子どもの思考があるにもかかわらず、教師が作る流れに追いつかない子どももいたかもしれない。ICTを活用すれば、問題を解き、解けた子は別の課題にぐんぐん進む。解き方を瞬時に共有し多様な解き方があることを知り、その中で自分に合ったやり方を発見し学ぶ授業であつたらどうだろう。教師には、困っている子にじっくり向き合う時間が担保されるだろうし、

いわゆる「浮きこぼれ」の子どもも AI ドリルを用いてより高次の学びを獲得することにつながるかもしれない。子ども達が何を学んでどんな力をつけているのかは、コンピュータ上に記録することで今まで見過ごしてきたものが見えることにもつながるであろう。今まで以上に、一人一人に対して、やる気を向上させるような声掛けを行うことで動機付けを行ったり、どのような方法で覚えれば記憶することができるのか、どういった方法だと理解することができるのかなど、一人一人に応じた指導ができるようになってきたのである。

では我々の“教える”仕事は必要ないのか。決してそうではなく、本研究で述べた学びの実現のためにも「教えるべきは教える」ことは必要である。ただ、我々には別角度から今の教師の姿を見直してみるフェーズに入ったことは、心に留めておくべきである。

また、本研究を行う中で学習観や指導観の転換と共に「研修観の転換」の必要性も痛感しているところである。我々の研究が前研究と大きく異なる部分、それは「学校の自走を促す」という点だ。何をどこまで提供することが最も最適なのか考え続けたい、学び続ける教員として。

最後に、本研究を進めるに当たり、快く授業を参観させていただき情報提供くださった雲南市立木次小学校の皆様、資料提供くださった浜田市立今福小学校の皆様、その他ご協力いただいた学校の皆様、さらには、本研究を市教育委員会の取組として校内研修を進めていただいた江津市委員会の皆様には感謝の意を表したい。

なお、本研究は、島根県教育センター浜田教育センター研究・研修スタッフ 澄川由紀、青木貴代子、小谷信介、中川貴如、多々納真吾、片岡靖典が共同で行ったものである。

#### 【引用文献】

- ・中央教育審議会(2021)「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す, 個別最適な学びと, 協働的な学びの実現～」(答申)
- ・内閣府:「経済財政運営と改革の基本方針 2022 新しい資本主義へ～課題解決を成長のエンジンに変え、持続可能な経済を実現～」(2022)  
[https://www5.cao.go.jp/keizaishimon/kaigi/cabinet/honebuto/2022/2022\\_basicpolicies\\_ja.pdf](https://www5.cao.go.jp/keizaishimon/kaigi/cabinet/honebuto/2022/2022_basicpolicies_ja.pdf)  
(2024. 4. 16 確認)
- ・『「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を目指して』(2023) 奈須正裕/伏木久始 編著 北大路書房

#### 【参考文献】

- ・『OECD Education 2030 プロジェクトが描く教育の未来』 白井俊 著 北大路書房
- ・五月祭教育フォーラム 2023「『個別最適な学び』の核心に迫る～ひとりひとりに向き合う教育のこれから～」講演より
- ・学習指導要領「次期改訂」をどうする? 検証 教育課程改革 渡辺敦司 著 ジダイ社
- ・中央教育審議会(2016)「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善及び必要な方策等について」(答申)

- ・中央教育審議会(2021)「『令和の日本型学校教育』を担う新たな教師の学びの姿の実現に向けて審議まとめ」
- ・経済協力開発機構(2015)「OECD ラーニング・コンパス (学びの羅針盤) 2030」
- ・樺島敏郎(2022)「個別最適な学び・協働的な学びを実現する『学びの文脈』」明治図書
- ・磯津政明(2022)「2040 教育のミライ」実務教育出版
- ・文部科学省「義務教育の在り方ワーキンググループ中間まとめ参考資料集」2024
- ・「新教育ライブラリ PremierⅡ」Vol.1 (2021) 「特集 “School Compass” を創る 未来志向の学校経営」ぎょうせい
- ・「新教育ライブラリ PremierⅡ」Vol.2 (2021) 「特集 令和の『個別最適な学び・協働的な学び』学びのパラダイムシフト」ぎょうせい